
大切な人

erika

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大切な人

【Nコード】

N1832D

【作者名】

erika

【あらすじ】

誰よりも、自分の事を、大切に思ってくれてる人に気づいていますか？誰よりも、大切にしたい人がいますか？自分にとって、本当に大切な人に出会った時、その人が本当に大切だと思った時、それに気づいた優理子が取った行動とは・・・クリスマスの夜、神戸のルミナリエを舞台にしたお話です。

第1話（前書き）

12/6から毎年恒例のルミナリエが始まりました。

関西で生まれ、関西で育ち、震災も体験した筆者が色々な気持ちで
過ごした2000年の12月に書いた作品。

あなたの大切な人が誰か見つかるといいですね？

第1話

「うー、寒っ」

俊幸は、ダウンジャケットを羽織り直すと、両手をジーンズのポケットに突っ込んだ。

日曜日、夕方6時過ぎの三宮駅。今日は、クリスマススイブという事も重なってか、いつもよりも人が多かった。いや、それだけではない。この季節、この時間、こんなにも人が多いのは、今日が、毎年、恒例となっている神戸ならではのイルミネーション、ルミナリエの最終日2日前だからだった。その為、駅は、ルミナリエを見るために集まった人々でごった返していた。

優理子とは6時に待ち合わせていた。けれども、まだ姿は見えない。

3日前、俊幸は、断られるのを覚悟で、優理子に、「クリスマススイブに会わないか？」と電話した。「一緒に、ルミナリエを見よう」と誘った。けれども、優理子の返事は、今ひとつだった。

「バイトがあるから」

それは、決して嘘ではないだろう。けれども、それが好きな相手なら、「遅くなってもいい？」と聞いてくるはずだった。けれども、優理子はその言葉を言わない。

俊幸は、仕方なく、もう一押ししてみる。

「何時に終わるの？」

「んー、たぶん5時」

優理子は、生半可な返事をした。

自分のバイトの事だろう？ たぶんって何だよ、たぶんって・・・
俊幸は、ため息が出そうになるのを抑えて、続けて押す。

「じゃ、その後にでも、会わない？」

「・・・・・・・・・・」

やっぱり、優理子からの返事はない。

即答してもらえないなど思っていたいなかった。それは、優理子に告白した時からわかっていた事だった。俊幸は、1ヶ月程前に、優理子に告白していた。そして、その時の優理子の返事もあいまいだった。だから、優理子のそのあいまいな返事は、ある程度は覚悟していた。けれども、無言になるのは、少しずるいと思ったりもする。嫌なら嫌だと言って欲しい時もあるのだ。

「会って欲しいんだけど・・・」

少しの沈黙の後、優理子は仕方ないという風に、鈍い返事をした。

「んー」

俊幸は、まだ一度も、ルミネリエを見た事がなかった。いつも、なぜか、このシーズンになると、1人になり、幸せなクリスマスをおごした事がなかった。

2000年のクリスマス！今年こそは、一番好きな人と、一緒にルミネリエを見に行きたい！俊幸は、そう強く思っていたのだった。だから、何が何でも、優理子と行きたかった。そして、勇気を出して電話したのだった。

断られるかもしれない・・・

俊幸は、そう思っていた。けれども、心のどこかでは、もしかするとという期待がないわけでもなかった。けれども、優理子ははっきりとした返事をしなかった。優理子は、いつも、どっちつかずの返事をする。そして、今回も、どっちつかずのまま、とりあえず6時に駅でと約束された。

優理子が、生半可な返事をするには訳があった。要は、俊幸の事が好きではないのだ。世間では恋人同士が楽しく過ごさずであるうクリスマス。そんな日に、彼氏でもない相手と過ごしてくれる訳がないのはわかっていた。けれども、俊幸は、それでもいいと思っていた。ずっとそれでもかまわないと思っていた。そう思いながら1

年を過ごそうとしていた。けれども、それも、そろそろ限界だった。

クリスマスイブに会って、ルミナリエを見て、そして、雰囲気
が良くなった時に、もう一度告白！ 今日こそは、きちんと返事を
もらうつもりだった。なんとなく、そういうムードで持っていくと、
いい返事がもらえるのではないかと期待していたのだった。

けれども、実際は、クリスマスでなくても良かった。雰囲気
に、ムードに、イルミネーションに頼ろうなどとは思っていなかった。
ただ、告白の返事がO・Kじゃなかった時に後悔したくなかったの
だった。断られるかもしれない、そう思うからこそ、最後の思い出
として、ルミナリエを持ってきたのだった。

第2話

初めて、優理子に会ったのは、まだ寒さが残る3月の半ばだった。

「僕達、そろそろ会わない？」

それは、知り合って3カ月後の事だった。俊幸と優理子はメールで知り合った仲だったのだが、その時の優理子の口癖は、「私、もう信じないよ。もうネットで知り合った人には、絶対に会わない」だった。何があつたのかはわからない。けれども、その時の優理子はかなり傷ついているようだった。インターネットで知り合った人の事を、全く信じようとしていなかった。そして、俊幸は、そんな優理子の心を、考えを思い直させることが出来たらいいなあと思っていた。だから、俊幸が、そんな優理子に「会わない？」というのは、かなりの勇気がいる事だった。

知り合った直後の優理子からのメールは、いつも心がこもっていなかった。いつも、10行程程度の内容だった。けれども、俊幸は、そんな優理子に、日々つまらない出来事や友達や家族との何でもない会話など、とてもたくさんの事を書いて返した。そして、そうするうちに、優理子からのメールの量も、次第に増えていった。

そして、メールの交換を始めてから3カ月後。

俊幸は、勇気を出して言ったのだった。

「僕と、そろそろ会ってくれない？」

思えば、その時の優理子の返事も、何処となく乗り気じゃなかった。けれども、鈍くも、O・Kだった。そして、会う事が決まってから、2人は電話番号を交換して、電話で連絡を取るようになったのだった。

それは、俊幸が、優理子の気持ちを考えての事だった。

初めて会った時の優理子はかわいかった。それは、容姿がどう

とか仕草がどうというよりも、中身のなものだった。考えている事とか思っている事が、俊幸にはとても可愛らしく思えた。そして、何よりも、優理子の笑顔が、俊幸の心を捕らえて離さなかった。

ドライブ好きの俊幸は、優理子を海へとドライブに誘った。

3月の海はとても寒かった。けれども、それについて、優理子はちつとも文句を言わなかった。それどころか、車の中の優理子はとても無邪気で、楽しんでいるようにも見えた。そして、それが、また俊幸の気持ちを引き込ませた。

会ってからのメールの交換は、以前にもまして、俊幸の心をあたたかくした。優理子の書いた一言一言が、まるで生きているかのように感じられ、俊幸の脳裏に優理子の無邪気な笑顔を思い浮かべた。そして、俊幸は、優理子と自分の考え方がとても似ていると思うようになった。あまりにも似ている為、自分達が出逢ったのは運命じゃないか？と思ったりもした。ずっとこのまま仲良くしたい。ずっと一緒にいたい。手放したくない。そう思った。そして、2回目のドライブの帰りの車の中で、俊幸は、優理子に1回目の告白をしたのだった。

けれども、告白の返事は、ノーだった。

「好きな人がいるの。もう、とつくの昔に別れてしまったんだけど、でも、まだ忘れられないの。まだ、とても好きなの。だから、こんな気持ちのまま、あなたの気持ちに答えらる事は出来ない・・・」

俊幸の心に、静かに波が立った。

「僕じゃ、ダメかな？」

俊幸は、優理子をじっと見つめて言った。

優理子は、ゆっくりと首を左右に振った。

「ごめんなさい・・・」

優理子の目は、涙目になっている気がした。

「あなたに会った事は、本当に良かったと思ってる。あなたは、私に、もう一度、ネットの出逢いを信じてみようって思わせてくれたから。だから、会ってみたいって思った。会いたいって思った。だ

から、ありがとう。でもね、好きにはなれない」

優理子はそう言うと、気まずそうに、車の窓の外へと目を反らした。

そして、俊幸は、そんな優理子をちらりと見ると、自分の気持ちを伝え始めた。

「僕はね、最初、優理ちゃんとメールの交換をし始めた時、優理ちゃんの考え方を変えてあげたいって思ったんだ。優理ちゃんの心を癒してあげたかったんだ。元気づけてあげたかった。だからね、今は、そう出来た事が本当に嬉しい。それだけで満足だよ。心が満たされてるんだ。本当にね」

窓の外を見ていた優理子が、俊幸の方を向く。そして、俊幸を見つめる。

「それにね、優理ちゃんとは、本当に自然体で居られるんだ。今まで、そういう風に思った女の子は居ないっていうぐらいにね。だから、僕としては、これからもずっとメールフレンドとして、仲良くして欲しいんだけど・・・」

俊幸がそう言うと、優理子は、静かに頷いた。

そして、2人は、その後、特に会うこともなく、平穏なメールの交換だけが続けられていた。

けれども、そんなある日、突然、優理子から俊幸の携帯に電話がかかってきた。

「会いたい・・・今すぐに会いたい・・・」と。

第3話

駅で待つ俊幸の携帯が鳴った。俊幸は慌てて、その電話に出た。「はい、もしもし」

けれども、電話の相手からの返事はない。着信は公衆電話からになっていた。俊幸は、少し不思議に思った。けれども、すぐに、それが優理子からではないか?と思った。

「優理ちゃん? 優理ちゃんだよな? 今どこ?」

「ごめんね。ホント、ごめん・・・」

それは、とてもとても小さな声だった。そして、その声は涙声だった。

「どうしたの? 何かあったの?」

俊幸は、心配になって、今にも乗り出すかのような勢いで聞いた。けれども、優理子からの返事はない。

きつと、また泣いているのだろうと、俊幸は思った。俊幸の脳裏では、1ヶ月前に俊幸が告白した時の優理子の涙を浮かべた顔が思い出された。

1ヶ月前、俊幸は、優理子に2度目の告白をした。

突然、優理子が泣きながら、電話をかけてきてから、俊幸は、もうおとなしくしておくのは止めようと思っていた。何に苦しんでいるのかはわからない。けれども、優理子が、辛くて、悲しくて、とても沈んだ世界に居るのは確かだと思った。

無理を言っつて、メールフレンドじゃなく本当の友達になりたいと、たまにでいいから会ってくれるようにと言ったのだった。

そして、優理子は、一応、それにO・Kし、二人はたまに会い、デートするようになった。

けれども、あの初めて会った日の車の中での無邪気な笑顔を見る事は出来なかった。どこか寂しげな、どこか怯えているような、

そんな顔しか見る事が出来なかった。たまに笑ってくれても、それは、心から笑っていないという事が、俊幸には痛いほどわかった。

どこへ連れて行っても、何を話しても、それは、優理子の影法師のように思えた。本当の優理子はその中には居ないように感じられた。

どうすればいいのか？ どうすれば、前のような優理子に戻ってくれるのか？ 俊幸は、悩みに悩んだ。そして、迷った末、2回目の告白を決意したのだった。

「優理ちゃんが大事なんだ。とてもとても大切な人なんだ。好きとか嫌いとかそういう気持ちだけじゃなくて、本当に心から守ってあげたいって、助けてあげたいって、元気づけてあげたいって、そう思うんだ」

けれども、優理子からの返事はあいまいだった。

「私は、あなたがくれるほど、あなたに気持ちをあげられない。ごめんなさい・・・ いつか、私はあなたを裏切るかもしれない」

優理子の瞳から、大粒の涙が、ぼたぼたと落ちた。

困らせた！ 言うんじゃないかった！ 咄嗟に、俊幸の頭を後悔という気持ちで走った。自分が辛くさせてるような気がした。余計に苦しめてるんじゃないか？と思った。けれども、もう後には引けなかった。

「裏切られて、裏切って、それは、いけない事だけど、でも、そういうのもなければ、人と付き合ってるって事にはならないんじゃないかな？ 人と人が生きていくには、そういう事もあっても仕方ないんじゃないかな？ 僕は、優理ちゃんになら、裏切られてもいいよ」

優理子は黙っていた。

「それとも、僕の事は嫌い？」

優理子は、首を左右に振った。

「嫌いじゃないけど・・・ このままじゃダメかなあ？ このままがいい・・・」

優理子の瞳から、たくさんの涙が溢れていた。俊幸には、その涙は、まるで止まる事を知らないように見えた。

自分では無理なのだろうか？ 自分では、どうしようもないのだろうか？

「ねえ、今どこにいるの？」

俊幸の言葉に対する優理子からの返事は、やはりない。

俊幸は心を落ち着け、そして、うん！と力強く頷くと言った。

「僕、待つてるから。優理ちゃんが来るまで、ずっとずっと待つてるから」

なぜ、そう言ったのかはわからない。けれども、3度目の告白は、なんとなく、今日でなければいけない気がした。今日、会って言わなければならぬ気がした。他の日では、ダメな気がした。

「ずっと、待つてるからね。だから、いつでもいいから、気が向いたら来てよね」

俊幸は優しく、けれども強く、そう言つと、電話を切った。それから、そのまま携帯で時間を確認した。もう9時を過ぎていた。待ち合わせの約束の時間からは、既に3時間が経っていた。

「もう無理かもなあ」

俊幸は、心の中でそう呟くと、小さなため息をひとつついた。

ずっと見たかったルミナリエ。

今年も、また見る事が出来なかった。

けれども、それは、今の俊幸にとっては、もう別にどうでもいい事だった。それよりも、優理子が、ちゃんと来てくれるかどうか？ その方が大事だった。

もしも来なかつたら・・・

ふと、そんな嫌な予感が、俊幸の頭をかすめた。そして、優理子が電話をかけてきた時の事を思い出していた。俊幸は、あの日、

今日のように待ちぼうけを食らった時の事を思い出していた。

その日は、いつもにもまして、天気の良い日曜日だった。車好きの俊幸にとっては、絶好のドライブ日和だった。けれども、前日に夜更かしをしていた俊幸は、目が覚めたのが、午後1時過ぎだった。

「うわー、今からだったら、もう遠くにいけないなあー」

ドライブ好きな俊幸は、いつも毎週末、一人で車を走らせては、海へ山へとドライブを楽しんでいた。けれども、その日、俊幸は起きたのが遅く、どうしようかと悩んでいた。そして、ちょうどそんな時だった。

いつもは鳴る事のない携帯が鳴った。

「会いたい・・・今すぐに会いたい・・・」

それは、優理子からだった。何か、切羽つまった感じで、その声は震えていた。

「泣いてるの？」

俊幸は、心配になって聞いた。けれども、優理子は無言だった。「今どこ？　すぐに行くから。だから、そこで、じっとしてるんだよ」

俊幸は、優理子にそう言うと、慌てて、車を飛ばした。

日曜日、お昼過ぎの高速道路は、少し込んでいて、一直線に、一斜線をまっすぐには走る事が出来なかった。俊幸は、右へ左へと車の間をぬって、時速150キロで、優理子が待つ場所へと車を飛ばした。けれども、その場所へ着いた時、優理子の姿はなかった。俊幸は、慌てて優理子の携帯に電話したが、それも繋がらず、仕方なくその場所を後にしたのだった。

今度も、すっぱかされるかもしれない。

今度も、来ないかもしれない。

俊幸の脳裏を、そんな思いがよぎる。

けれども、もう後戻りは出来なかった。

どんな時でも、そばに居てあげたい。

どんな時でも、笑わせていてあげたい。

俊幸のそんな気持ちに、優理子を待つという行動にさせるのだった。

第4話

「良かったね」

「うん、綺麗だった」

「また、来年も来ようね」

駅で、優理子を待つ俊幸の耳に、ルミナリエへ行って戻ってきた人達の声が届く。

俊幸は携帯を取り出すと、また、時間を確認した。優理子から電話があつてからもう30分。9時半を過ぎていた。

「はあー」

俊幸は大きく1回息を吐き、それから、優理子の番号をダイヤルし始めて、少し迷った後、携帯をまたポケットへと戻した。もし、また繋がらなかつたら・・・と、怖くなったのだった。

今の俊幸には、もう待つことしか出来なかった。

「もう来るはずないか・・・」

俊幸は小さく呟くと、駅の構内を出て、東遊園地へと歩き出した。

夜の10時。さすがに人通りも少なくなっていた。

東遊園地へと続くフラワールードも、クリスマスという事もあってか、それなりにライトアップがされていた。けれども、それは、俊幸の心をとても寂しくさせた。

この道を、優理子と歩きたかったなあ。

俊幸はそう思いながら、自分の気持ちを整理していた。ルミナリエに来ないという事が、優理子の返事なのだろうか？ もしかすると、優理子は、今日、俊幸がはつきりとした返事を求めている事に気づいていたのではないだろうか？ だから、来なかったのではないだろうか？ 俊幸は、ふとそんな気がした。そして、そう自分に言い聞かせていた。それでも思わないと、やっていけない気分

になりそうだった。

俊幸が東遊園地へ着くと、もうライトアップは終わり、辺りは暗くなっていた。けれども、ルミナリエのイルミネーションの名残が残っているのだろうか？ それとも、周りのビルの窓からこぼれる光のせいだろうか？ うっすらと、けれどもはつきりと周りの人達の顔を見ることが出来た。

ライトアップも終わっているというのに、そこは、若者の集団とカップルで賑わっていた。12月最大のイベントの日だからだろうか？ 10代後半くらいの若者の集団が騒いでいた。少しお酒も飲んでいるみたいだった。そして、そんな中、まれに小さい子供を連れた家族の姿が目についた。けれども、俊幸のように1人で来ている者は居なかった。

俊幸はケジメをつける為とはいえ、1人でこの場所に来た事をとて後悔した。あのまま電車に乗り込み、帰るべきだったと思った。

いつしか、俊幸は涙目になっていた。

「これでいい。これでいいんだ。好きじゃないのに、無理に付き合ってもらっても、辛いだけだから」

俊幸は、そう自分に言い聞かせ、そして、帰ろうと振り返ったその時だった。

「優理ちゃん・・・」

俊幸の目の前には、優理子が立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1832d/>

大切な人

2010年10月13日17時33分発行